

# ハンドモデルの恋人

綾瀬麻結

## 目次

あなたが想うよりずっと	5
愛のシグナルをずっと	141
永遠の囁きをずっと	263

あなたが想うよりずっと

静寂に包まれた真っ暗な廊下。慣れた場所なので迷うことはないが、物音ひとつしない深夜に歩くのは、とても勇気がいる。

それでも壁から手を離さなければ、必ずあの場所へたどり着ける——そう信じて、十二歳の能見紗羅は、白いネグリジェ姿のまま抜き足差し足で前に進んだ。

暦の上では春といつても、まだ肌寒い三月下旬。

指先が氷のように冷たくなつても壁から手を離さず、先を目指してゆっくりと歩を進める。指先が壁の曲がり角に触れたところで曲がった。窓から射し込む月明かりが廊下の先を妖しく照らしている。

かすかな光に紗羅は安堵の息をつくと、小走りで奥へ進み、目的の部屋の前で立ち止まつた。

躊躇することなく手を伸ばし、音を立てないように静かにレバーを押す。いつもは夜になると「立ち入り禁止」と宣言するように鍵が閉まっていたが、今日はすんなりと開いた。

薄暗い部屋をほのかに照らす、間接照明。

まるで紗羅の訪れを待つていたように、それは彼女を優しく迎え入れた。その明かりに導かれて、

キングサイズのベッドへ近づく。音を立てないように、そつとベッドの端に腰を下ろし、気持ち良さそうに眠つている彼……榎井唯人の顔を切ない思いで眺めた。

唯人と初めて出会つたのは、今から六年前。目の前に突然王子様が現れたあの日のことは、今までよく覚えている。

あの日、紗羅は金色に輝く弁護士記章を胸に付けた真柴大介に手を取られて、里子となるために児童養護施設からこの屋敷に連れてこられた。

車から降りるなり、目に飛び込んできた洒落た大きな門扉、そこから続くやかな階段の先には公園のように広い庭、そして鳥が翼を広げたような形の豪邸。それら全てに圧倒された紗羅は萎縮してしまい、玄関に入ったところで一步も動けなくなつた。吹き抜けの天窓から降り注ぐ、やわらかい光のシャワーさえも、彼女の心をほぐせなかつた。

その時、二階から一人の男の子が駆け下りてきた。紗羅の前に立つと興味深そうに彼女を眺める。そして彼はにつこりと微笑み、紗羅と同じ目線になるようにしゃがみこんだ。

「君が、紗羅だね？ これからは、俺が紗羅のお兄ちゃんなんだよ」

「……紗羅には、お兄ちゃんなんかいないもん！」

薄汚れたティベアを小脇に抱えた紗羅は、真柴の手を痛いぐらいに握り締めながら、兄だと口にした彼から必死に身を隠そと、真柴の後ろにぴったりとくつついた。

そんな紗羅の態度に彼は一瞬戸惑いをみせたが、すぐにしつかりと頷いた。

「そつか。そうだよな……。俺は紗羅のお兄ちゃんなんかじゃないよな。よし、わかつた！ 俺た

ちは大切な家族を亡くした同士だ。だから、俺のことは紗羅の好きなように呼んでいいよ」

そう言って、彼はどんな人をも魅了する溫柔な笑みを浮かべた。

「俺の名前は、唯人。この春から紗羅と同じ……ピカピカの一年生なんだ。紗羅は小学生、俺は中学生だけどね」

「……唯、くんも……ピカピカの一年生？」

「ああ、そうだよ」

唯人はほがらかに笑い、紗羅の頬を指で軽く押す。それが妙にくすぐったくて、紗羅はこの家に入つて初めて笑みを零した。

「紗羅は笑った方が可愛いね。よし、もつと楽しいものを見せてあげる。紗羅のランドセルに似せたケーキを作つてもらつたんだ。俺と一緒に見に行こう。さあ、……おいで」

目の前に差し出された手を、紗羅は見つめた。この手の持ち主を信用してもいいのかわからず、問うように真柴を見上げる。

真柴は紗羅を安心させるように柔軟な笑みを浮かべ、静かに頷いた。

「唯くんを信じていいいんだよ、紗羅ちゃん」

児童養護施設に入つていた半年、週に一回は紗羅を訪ねてくれた真柴。

彼の言葉なら信じられる——そう思つた紗羅は真柴の手を離し、唯人が差し出す手に自分の手を滑り込ませた。

「これからは、俺が紗羅を守つてあげる。……だから、もう何も心配しなくていいからね。二人で

ケーキを食べたら、一緒に真柴のおじさんと母さんがいるところへ行こう」

「うん！」

慈しそうな表情を向ける唯人。

この先、自分を幸せにしてくれる王子様は唯人しかいないと、思つた瞬間だつた。

あれからたつた六年しか経つていないのに、唯人は明日、紗羅を残してアメリカへ発つてしまう。唯人と離れ離れになるとと思つただけで、紗羅の目に映る彼の顔はどんどんぼやけていつた。両親が事故で亡くなつたと理解したときでさえ、こんなに泣かなかつた。悲しむ暇がないほど唯人が可愛がつてくれたし、唯人の母も実の娘のように愛情を注いでくれたからだ。

でも今は胸が張り裂けそうなほど痛くて、苦しくて……取り乱してしまいそうだつた。

このアメリカ行きが唯人にとつてとても大事だということは、紗羅にも十分に理解できた。

彼の父が亡くなるまで経営していたジュエリー会社は、現在彼の母が社長を務めているが、遅かれ早かれ、その社長の椅子には唯人が座ることになるだろう。海外で経営学を学び、ダイヤモンド市場をその目で確認し、さらに会社を発展させるために留学するのだ。

遊びに行くわけではないとわかっているのに、「紗羅を一人にしないで！」と駄々をこねてしまつた。いたいほど、彼と離れ離れになることが辛かつた。

唯人は紗羅の初恋の人だから……

上掛けをギュッと握り締め、紗羅は声を出さずに涙を流した。

このまま彼の寝顔を見ていたら、泣き崩れてしまうかもしれない。それだけは絶対にしたくない。明日の朝、「アメリカの大学でいっぱい勉強してきてね」と笑顔で送り出すために、この苦悶は心の奥深くへ押し込めておかなければ。

にもかかわらず、紗羅は唯人の温もりを求めて手を伸ばし、彼の頬に触れようとした。だが寸前で手を止め、引き戻す。

そして、彼の方へゆっくり身を傾けて、柔らかそうな唇に視線を落とした。

「唯くん……」

（大好き。……本当に大好きなの！）

さらに顔を近づけて、まるで想いを吐き出すように、紗羅は眠っている唯人に口づけた。彼の柔らかな唇の感触が伝わってきた途端、心臓が激しく高鳴る。

初めてのキスに、紗羅の胸は歓喜に躍り、沸騰しそうなほど熱くなつた血が冷えた躯を火照らせていく。

ただ唇を触れ合させただけのキス、しかも一方的なキスだということはわかつていて。それでも口づけをしたことで、唯人への気持ちが大きく膨らんでいく。

（絶対に素敵な女性になるから、唯くんが戻つたらわたしを恋人にしてね）

彼の寝顔を見ながら、心中で囁く。

無防備な唯人をもつと眺めていたいが、彼が目を覚ましてしまう前に自分の部屋へ戻るべきだろう。

紗羅はゆっくり彼から離れて立ち上がった。

一度背を向けて数歩進んだが、後ろ髪を引かれる思いでもう一度だけ振り返る。

「……辛い時期を乗り越えられたら、必ず良い未来が待つている」

唯人の留学が決まってからというもの、紗羅はこの言葉をよく口にするようになつていて。

紗羅はその言葉を噛みしめながら手の甲で涙拭い、静かに彼の部屋を出ていった。

\*\*\*

——八年後。

庭に植えてある紫陽花の装飾花が開いてきた、梅雨入り間近の六月上旬。

紗羅は、今耳にしたことなどをもう一度訊き直そうと、二階のバルコニーから身を乗り出した。「おばさま？ 今……なんておつしやつたの!?」

プライベートプールの傍らに作られたインドネシア風の東屋で、アフタヌーンティーを楽しんでいる唯人の母、樺井由美を見下ろす。

「今日、唯人がアメリカから戻つてくるつて言ったのよ。あの子も役員の一人として、本社で経営を学ばなければいけないから。昨夜も言ったのに……紗羅はわたしの話を聞いていなかつたの？」由美の言葉が鋭い矢となつて、紗羅の心臓に突き刺さる。その痛みに思わず紗羅は顔をゆがめた。「……わたし、きっと聞き逃していたのね。おばさま、本当にごめんなさい」

「いいのよ、そういうこともあるわ。一時間ほど前に関西国際空港に着いたと連絡があつたから、もうそろそろ到着するんじやないかしら？」

(い、一時間前？ もう日本に着いていて、唯くんはこっちへ向かってるつてこと!?)

再び紗羅の胸に、圧迫するような痛みが襲ってきた。

今はまだダメ——由美の視線を意識しながら、込み上げる痛みを必死に堪える。

「だつたら……ふじえ藤江さんは今ごろキツチンで忙しくしているわね。じゃ、わたしも彼女のお手伝いをしてくるわ」

家政婦の名を出し、紗羅は踵きびすを返して部屋に戻った。

だが、あまりにも唐突な話に軀が震え、窓際で立ち止まり俯かぶつたいた。身動きができないのは、唯人と会う心の準備ができていないからだろう。

唯人はアメリカの大学を卒業したあと、株式会社ジユエリーカシミーに入社し、そのままバイヤーアシスタントとしてアメリカ勤務を命じられた。

二十四歳まで、アシスタント業務、鑑定に従事していたがその後はバイヤーに昇格。だが、彼はそれ以降もずっとアメリカに行つたきりだつた。いつ日本へ戻るのだろうと気になつていたが……どうとう唯人が帰つてくる！

お洒落しゃれをして唯人を迎えた。彼の顔を見て話すのは八年ぶりだから、素敵な女性に成長したと思われたかつた。

だが由美の手前、それは控えた方がいいだろう。波風を立てたくない、紗羅が本気で思つて

るのであれば……：

紗羅はゆっくり歩き出して、まっすぐにドレッサーへと向かつた。グロスを取り上げ、薄く塗る。緩やかなパーマをかけた長い髪を胸元へ流したあと、姿見で自分の服装を確認した。

ストライプのマキシ丈ワンピース、その上に羽織つた七分袖の透かし編みカーディガン。

本当だつたら、唯人をドキッとさせるためにショートパンツを穿いて生足を出したいところだつたが……：

「大丈夫、このままで十分……女の子らしく見える！ ただ、唯くんの目にどう映るのか、それだけが心配だけど」

ドアを開けようとしてレバーに触れたとき、白いシルクの手袋が手を覆つていることに気付いた。慌てて手袋を脱ぎ、ソファの上へ放り投げる。

「危ない、危ない」

ホッと安堵の息をついた紗羅は、スカート生地を指で摘つまみ、部屋をあとにした。

階下のキッチンへ入るなり、古くから樺井家で働く藤江に駆け寄る。

「藤江さん、唯くんが戻つてくるんですって！」

若くして夫を亡くし、子供もいなかつた藤江は、家政婦協会を通じて樺井家の住み込み家政婦となつた。幼い紗羅が里子として引き取られてから、彼女はずつと実の娘のように可愛がつてくれている。

「ええ、一週間ほど前に、奥様から聞きましたよ。今日の夕食は唯人さんが好きだつたものをテー

ブルいっぱいに並べてほしいと言われて、もうバタバタですよ」

忙しくしているのに嬉しそうに微笑むということは、藤江も唯人の帰国を喜んでいるということ。

同じ気持ちだと知つてにつくりしたものの、紗羅の心には冷たい隙間風が吹いていた。

藤江には一週間も前に唯人の帰国を告げていたのに、由美は、紗羅には教えてくれなかつた。

(どうしてこんな風になつてしまつたの?)

「わたしも手伝うわ」と言い、藤江からボウルを受け取りつつも、紗羅はそつと俯いた。<sup>うつむ</sup>

株式会社ジユエリーKASHIの企画開発室で働いていた父が、家族同伴の出張でコロンビアへ行くことになつたのは、紗羅が六歳のときだつた。

両親は紗羅をアメリカの託児所に預けてコロンビアへ向かつたが、二人はジユエリーKASHIの社長と共に鉱山の落盤事故に遭い、紗羅を残して亡くなつた。

事故のことを聞かされぬまま紗羅は日本大使館の職員と帰国し、その後半年間児童養護施設に入つていた。そんな彼女を里子として引き取つてくれた人こそ、唯人の母の樺井由美だつた。同じ事故で由美も夫を亡くしていたので、本当は他人に構つてゐる余裕なんてなかつただろう。

だが半年かけて里親の認定を取り、由美は紗羅を樺井家に迎え入れてくれたのだ。

それからというもの、由美は実の母のように紗羅を愛してくれた。紗羅がかなづちと知つてわざわざ庭を潰してプールを作つてくれたり、将来を考えて習い事にも通わせてくれたり、本当に心を砕いてくれた。

そんな由美の心を引き裂いてしまつたから、彼女は唯人と紗羅を引き離そうとしたのかもしれない。

由美が勧める大学ではなく、自分で選んだ短大へ進みないと口答えをしてしまつたせい……  
だが、もう上流階級の子息令嬢が通う学校には進みたくないかった。

由美が勧めるまま私立の小学校へ編入し、エスカレーターで高校まで進んだものの、年を重ねれば重ねるほど、紗羅は自分が不似合いな学校へ通つていることを思い知らされた。

同級生から仲間はずれにされることはないが、紗羅はいつも感じていた。気高い白鳥の中にみにくくあひるがまぎれこんでしまつたようだと……

紗羅が樺井の名を継ぐ養女ではなく、ただ養われているだけの里子という立場だつたことも原因だつたのかもしれない。

遠巻きにする同級生たちの中で、どれほど寂しい思いを味わつたことか。

一時期、どうして樺井の姓を与えてくれないのかと哀しく思つていた。

だが、里子であれ養女であれ、由美と唯人から注がれる愛情に変わりはないと氣付いて以降、あまり気にならなくなつた。

それがいけなかつたのだろうか？ 実の母のように愛してくれるのをいいことに、由美的勧める大学には行きたくないと言つたから、紗羅に失望したのではないだろうか。だから、唯人が数年ぶりに日本の土を踏むというときも、教えてくれなかつたのかもしれない。

語学研修旅行、スキー合宿と數えあげたらきりがないが、由美に勧められて家を空けたときに限

つて、唯人は日本へ戻つてくる。

紗羅の成人を祝うために、唯人が一時帰国したときもそうだった。そのことを知らされていなかつた紗羅は、短大の友人たちと卒業旅行へ出かけていた。

その結果、唯人に「俺つて、紗羅に嫌われるのかな?」と言わせてしまう始末。

彼がそう思うのも当然だろう。唯人が日本へ帰国すると、紗羅は必ず家を空けていたのだから。

隣に座つて会話を聞いている由美の手前、反論することもできず、紗羅は電話口でひたすら彼に謝つた。

それが三年間も続いた。メールのやりとりでは、紗羅を嫌つてるようには感じられなかつたが、こんな状態が続いたのだから、唯人もいい印象は持つていなかつたはず。

だからこそ、唯人と再会するそのときは、素敵な女の子として彼の前に立ちたかつた。

「……さん、紗羅さん!」

物思いにふけつていた紗羅は、藤江の声でハツと我に返つた。

「な、……何?」

「帰つてきたみたいですよ、唯人さんが」

「えつ?」

紗羅は咄嗟に耳をすました。

広い家だが静かなため、玄関の話し声がキッチンにいる紗羅の耳にも届いた。由美の嬉しそうな

声と、低い男性の声が。

「ど、ど、どうしよう! わたし……」

手に持つていたボウルをテーブルに置き、紗羅は急いで髪を撫でた。そんな彼女に、藤江が口元を綻ばせる。

「どこともおかしくありませんよ。紗羅さんはとても綺麗ですから、そのまま唯人さんに会つても大丈夫です」

藤江の言葉に、紗羅は身<sup>み</sup>頸<sup>び</sup>肩<sup>いき</sup>もいいところだと笑つてしまいそうになつた。でもそれが、彼女を勇気づけてくれる。

「ありがとう。あの、唯くんのところへ……行つてもいい?」

「ええ、どうぞどうぞ。ここは藤江一人でも十分ですかね」

にこやかな笑みで背中を押してくれる藤江に頷き、紗羅はキッチンから飛び出した。

紗羅が思い浮かべる唯人の顔は、アメリカへ留学した十八歳のままだ。彼女が知る限り、彼の写真が樺井家に送られてくることは一度もなかつたので、二十七歳になつた今どういう大人になつているのかわからぬ。

はやる気持ちを抑えられないまま、紗羅は玄関ホールへ向かつた。角を曲がろうとしたところで、唯人と由美の話し声が耳に届き、ピタッと足を止める。

「……ところで、今日こそ紗羅は家にいるんだろうな?」

「何、その言い方。まるで、お母さんが紗羅を隠しているみたいに……」

「だつて、そうだろ？ 僕が日本へ戻つてくる日に限つて、紗羅は家にいなかつたんだ。僕がそう思つても不思議じやない」

「タイミングが悪かつただけなのに、唯人はお母さんのせいにするのね！」

「あのさ、俺がどれほど長い間紗羅に会つていなかつたと思う？ あいつが中学生になる前から会つてないんだ。また次会えるだろう……そう思つていたら、いつの間にか八年も経つてしまつた。紗羅、……一階にいるんだろ？」

階段を駆け上がる音に、紗羅は慌てて玄関ホールに入つた。

「唯くん！」

唯人の名を呼び、紗羅は彼を求めて一階へ続く階段を見上げる。途中で動きを止め、こちらを見下ろす唯人と視線がぶつかった。

「……さ、紗羅？ 本当にあの……おチビちゃん？」

目を白黒させて、紗羅をまじまじと眺める唯人。

だが紗羅もまた驚愕していた。精悍な男性へと成長した彼の姿に、心臓が痛いぐらいに早鐘を打ち、骨にまで震えが走る。

十九歳の誕生日を迎える直前に唯人はアメリカへ発つたが、すでにそのころから大人の片鱗へんりんを見せていた。今では、男の色香が匂い立つ、素敵な男性になつていた。

モデルかと思うほどの容姿、一八〇センチは超えているだろう長身、そして柔らかな物腰。想像していた以上の男ぶりに、胸の高まりが収まらない。

「やつと、……やつと会えたね、唯くん」

泣くつもりなんかなかつたのに、目の奥がツンと痛み、どんどん涙腺が緩んでいく。走り寄つて唯人に抱きつくつもうが、足が床に張りついてしまい、思うように動けなかつた。

「紗羅！」

唯人が階段を駆け下りてきた。大股で紗羅に近づき、両腕を広げて彼女をギュッと抱きしめる。だが、すぐに我に返つたように、その抱擁ほうようを解いた。

「悪かった！ ……紗羅は、もう子供じやないのにな」

唯人は照れくさそうに笑いを浮かべたが、急に表情を引き締めてまじまじと紗羅を見下ろした。「とても……、とても綺麗だよ。俺の想像をはるかに超えて、美しい女性になつたな」

「唯くんは、いつからそんなにお世辞が上手くなつたの？ あつ、もしかしてプレイボーイとか？」

浮き立つ気持ちを隠さず、紗羅は微笑んだ。

こういう会話をしてみたいと、ずっと夢見ていた。幼い妹として見られるのではなく、男と女として会話を楽しみたいと。それがようやく叶つて、紗羅の胸は小鳥が羽ばたくようにざわめく。

だが、その喜びは一瞬にして消えた。

「紗羅！ 唯人に向かつてなんてこと言うの！」

傍に由美がいることをすっかり忘れていた紗羅は不意をつかれ、うろたえたまま唯人から一步引いた。由美へ視線を向けると、紗羅にしかわからない咎めの色が、彼女の瞳に宿っている。

「おはさま、そんな……つもりではなかつたの」

慌てて謝る紗羅に、唯人が詫しげな視線を送ってきたが、彼の目を見返すことはできなかつた。

「由さん、何をごちやごちや言つてるんだよ。俺と紗羅の仲で、こんな些細な軽口を気にする必要

がいつたいどこにある？」

「それは……そうなんだけど、もう昔とは違うんだから」

「はいはい、わかりました」

由美に対しておざなりな返事をした唯人は、紗羅に視線を向けた。

「紗羅、こつちへおいで。この八年間のこといろいろ聞かせてほしいんだ」

「えっ？」

唯人は紗羅の手を取つて階段へ向かつた。引っ張られる形で階段を上がる紗羅の目に、心配そうに一人を見つめる由美の顔が映る。咄嗟に、紗羅は階下にいる彼女に声をかけた。

「おばさま！ すぐに唯くんと下へ行くから……」

由美を安心させようとただけなのに、紗羅の手を握る唯人の力が強くなる。紗羅は痛みに顔をしかめて、彼を仰ぎ見た。

「二人とも、早く下へいらつしやいね！」

懇願するような声が耳に届いたが、紗羅は返事ができなかつた。まるで走り出しそうな勢いで進む唯人についていくだけで、精一杯だつたからだ。

「唯くん！ お願い、もうちょっと……ゆっくり歩いて」

それでも唯人は速度をゆるめることなく廊下を進み、自室に入ったところでやつと紗羅を解放し

た。

唯人の部屋に一人きり。こんな状況は、寝ている彼に密かにキスして以来だ。

紗羅は急に恥ずかしさを覚えて、居ても立つてもいられず、陽が射し込む窓際まで歩いた。

「いつたいどうしたの？ この八年だつて……電話で話していたし、メールでも近況を伝えていたと思うんだけど……」

「ああ、そうだな。だが、俺の知っている紗羅は十二歳で止まつたままだから、今必死に子供の紗

羅と二十歳の紗羅を融合させようとしているんだ」

今の言葉から唯人が本当に驚愕していることが感じ取れた。

この八年、会うことができなかつたが、それがかえつて良かつたのかもしれない。今、こうして

唯人は、紗羅を女性として見てくれているから。

「わたしは、何も変わつてないわ……」

口元を綻ばせて、紗羅は振り返つた。その瞬間、目を見張つてハツと息を呑む。

まさか唯人が紗羅の真後ろに立ち、真剣な眼差しで彼女を見下ろしているとは思つていなかつたからだ。

「どう、変わつていない？」

「……何も、かも」

こういう展開に不慣れだとバレないように、紗羅は必死に平静を装おうとした。

だが紗羅の声はかすれ、唯人に聞こえてしまうのではと思うぐらい心臓が激しく高鳴り出した。

頬も、どんどん火照つてくる。

それでも紗羅は軽く顎を上げ、唯人の目をまっすぐに見つめ返した。

「俺を、嫌つてはいない?」

唯人の言葉に目を見開いた紗羅は、強く頷いた。

「もちろん! わたしが唯くんを嫌うなんて、そんなことは絶対に有り得ないわ」

「……じゃ、どうして俺が日本へ戻ってきたとき、家にいなかつた?」

「そのことは何度も謝つたのに、まだ……気にしているの?」

紗羅は作り笑いを浮かべて唯人の腕にそつと触れてから、ドアへ向かって歩き出した。

嘘はつきたくないが、唯人に由美のことを言うわけにはいかない。もし真実を知れば、彼は絶対に紗羅を守ろうとする。

大好きな二人が紗羅のことで険悪になるのは避けたかった。

「俺がいない間、……母さんと何かあつたのか?」

「まさか! 何もないわ。おばさまがわたしに良くしてくれているのは、唯くんも知っているでしょう?」

振り返り、唯人を安心させるように微笑む。その言葉は偽りではなく、真実だ。

由美は紗羅を実の娘のように愛し、優しく接してくれる。唯人が絡んでいなければ……

「そうなのか? ……母さんとは上手くいっているのか?」

眉をひそめた唯人が、紗羅の方へ歩み寄つてくる。紗羅は、彼が彼女に触れそうなほど近付いて

きても身動きしなかつた。ショートウルフカットにした柔らかそうな髪、意志の強そうなきりりとした眉、そしてその下にある切れ長の双の瞳を見つめた。さらに、まっすぐに伸びた鼻筋、そして、かつてキスをした唇に視線を落とす。

「紗羅?」

紗羅はすぐに視線を上げて、唯人と目を合わせた。

「ええ、何も……問題はないわ」

「そうか。それならいいんだが……」

「……そろそろ下へ行かないとね。おばさまも待つてているし、藤江さんも唯くんに会いたがつていたわ」

「そうだな。みんなでお茶でもしよう」

紗羅は唯人の腕に手を滑り込ませて、引っ張るようにして部屋をあとにした。こうして腕を組んで歩けることが嬉しくて、紗羅は唯人を仰ぎ見てにっこりと微笑む。当然彼も微笑み返してくれると思つたのに、なぜか思案顔で紗羅を見下ろしていた。

「唯くん、どうかした?」

「……紗羅は、今何をしているんだ? 短大を卒業して三ヶ月だろ?」

「メールで伝えたとおり、わたし……短大時代から続いているバイトをしていいの」

これまでいろいろな人に繰り返してきた台詞を言う。でも今は、それで納得してもらえるのかわからなかつた。

「だから、そのバイトとはいつたい何なんだ？」

さらに追及しようとする唯人に、紗羅は力なくため息をつく。

「そんなこと、別に……どうでもいいじゃない」

何のバイトをしているのか、それは言えなかつた。守秘義務があるので、口外することは決して許されない。

これは、由美との約束でもあるから……

紗羅がこの話題を避けたがつてゐるところがわかつたのだろう。彼はそれ以上追及しようとはしなかつたが、口にしなくとも、唯人の考えはひしひしと伝わってきた。

俺が紗羅の傍にいるのに、このまま隠し続けられるとは思つていらないよな？——声にならない言葉が聞こえてくる。

(この秘密はいつたいいつまで守れるの？一緒に暮らしが出したら、絶対に隠し切れない)

紗羅は軽く目を閉じて、空いた手でスカートの生地を弄び、これからのことを考えながら階段へ向かつた。

「紗羅ちゃん！」

突然聞き慣れた男性の声が階下から聞こえ、紗羅は我に返つた。

スース姿の荻島修司が、玄関に立つてこちらに手を上げている。ミリタリーショートの髪を無造作にワックスで遊ばせた彼は、いつも増して爽やかな笑みを紗羅に向けていた。

「修司くん？……いつたいどうして」

「修司くん、だと？」

階段を下りようとする紗羅の隣でいきなり立ち止まり、口調を荒くする唯人。どうして息巻くような言い方をするのかわからないものの、紗羅は彼をたしなめようとその腕を叩いた。

「唯くん！ダメよ、そんな言い方をしたら」

「ちよつと待て。紗羅は、いつから荻島のことを……親しく呼ぶようになったんだ？いや、その前に、どうしてあいつのことを知つてている？」

小首を傾げ、紗羅は修司と出会つたときのことを思い出していた。

そう、あれは桜が散ると同時に、紗羅の心に隙間風が吹き始めた中学一年のころ。唯人がアメリカへ発ち、寂しさに耐えられなくなりそうだった紗羅の前に現れたのが荻島だつた。

どんどん寒さ込んでいく紗羅を心配して、由美が荻島を櫻井家に呼んでくれたらしい。

彼は唯人の中学時代からの同級生で、さらに親友だという。紗羅はすぐに心を開き、彼と一緒に過ごすことで、唯人が傍にいない寂しさを埋めた。

荻島もそれを心得ていたのか、唯人の代わりに紗羅の高校入学、卒業、成人式……といった節目の行事を祝つてくれた。

唯人と会えない八年もの間なんとか頑張れたのも、彼がいてくれたからだろう。

由美的態度がおかしいと感じるようになつたときも、荻島がずっと傍にいて、短大へ進みたいといふ紗羅の気持ちを応援してくれた。

「唯くんは知らないの？」修司くんは、株式会社ジュエリーKASHIに就職して、今では広報

室の主任なのよ？」

「そしてわたしの——その先に続く言葉をグッと呑み込み、紗羅は隣の唯人を仰ぎ見た。

「それは知ってる。だが、荻島は……紗羅とのことを何一つ俺には話していない」

それを聞いた荻島が、階段の下で口を開いた。

「言うはずないだろ？ そんなの俺と紗羅ちゃんの問題で樺井には関係ないし。それにお前だつて、紗羅ちゃんの存在をずっと俺に隠していたじゃないか」

「当たり前だ。荻島に話したら、……っ！」

そこで唯人は何かに驚いたようにハッと息を呑み、口に手を当てて、あらぬ方向を向いた。

「唯、くん？」

「いや、何でもない。何でも……」

意味深な言葉を訝しく思いつつ、紗羅は唯人を引っ張るようにして階段を下りた。唯人の腕に絡めた手に荻島の視線が落ちる。紗羅を見つめる彼を見返す勇気がなく、紗羅は苦笑を浮かべて、唯人からそっと手を離した。

荻島は知っていた。紗羅が、ずっと唯人だけを愛し続けていることを……

そのことを告げたときのことを思い出すと、胸が苦しくなる。紗羅は荻島の優しさに甘え、そして傷つけてしまったから。だからこそ、彼には誠実な態度で接するよう努めていた。

「修司くん、今日はどうしてここに？」

過去を振り払うように頭を小さく振ると、紗羅は荻島に問いかけた。

「ああ、今日樺井が戻つてくるからって、社長から招待を受けていたんだ」

「男に喜ばれても、嬉しくはないが……」

ボソッと呟く唯人に、荻島は声を上げて笑つた。

「変わつてないね、樺井は。なんか、俺……嬉しいよ」

やんちゃ坊主のように小突き合う姿に、紗羅も笑みを零した。

これからは、ずっと唯人が傍にいてくれる。あとは、紗羅がこの気持ちを唯人に伝えるだけ……

この先のことを考えただけで、今までに感じたことのない幸せが紗羅を包み込んでいく。同時に

湧き起るワクワク感に、紗羅の口元は自然と綻んだ。

話し続ける唯人と荻島をその場に残し、紗羅は由美が待つ応接室へ足を向けた。言葉を交わしながらも、唯人と荻島がこつそり紗羅の後ろ姿を見ていたことに、彼女は全く気付かなかつた。

応接室で由美と合流し、しばらく歓談したあと、紗羅たちはダイニングルームへと移つた。

テーブルいっぱいに並べられた料理に感激した唯人は、外国人のように藤江を抱きしめ、その場は笑いの渦に包まれた。

唯人の話は尽きることなく、食事を終えるまで唯人のアメリカでの生活や仕事の話が続いた。荻

島も日本での話をし、四人は存分に夕食を楽しんだ。

食後のコーヒーを飲むために、再び四人は応接室へ戻つた。

「あなたがアメリカへ行つてから、わたしも紗羅も寂しい思いをしたけれど、唯人はいい経験を積

めたのね」

「外の世界を見させてくれた母さんには感謝してるよ。だが、これからは俺が一人の傍にいるから」

唯人は、由美から紗羅へ視線を移した。

相手の目を覗き込むように見つめるのは、海外暮らしが長かつたせいだろうか？

彼の強い眼差しに胸が熱くなり、紗羅は頬を染めてそっと視線をコーヒー・カップに落とした。

「ありがとう、唯人。でもね、これからはわたしだけでいいのよ。紗羅の傍にはいつも荻島さんがいて守ってくれているし、あと数年もしたら……幸せなお嫁さんになっていると思うわ」

「か、母さん？」

困惑した声で問いかける唯人と共に、紗羅も由美の真意を探るように視線を向いた。

「そうでしょ？ 紗羅？」

まさか、みんながいる前で紗羅に訊き返すとは思ってもみなかつた。もちろん由美は優しい笑みを浮かべているので、他意はないようと思われる。

だが、紗羅はもうわかっていた。

（どうしてわたしが唯くんに近づくのを許さないの？）

声にならない言葉を呑み込み、紗羅は無理やり笑みを浮かべる。

「……そうね。唯くんがアメリカへ行つてから、修司くんは兄のようにわたしをずっと守つてくれていた」

満足そうに頷く由美と誇らしげな顔をする荻島が、紗羅の目の端に入る。それでも、彼女は唯人

だけを見つめていた。

「兄のように」という言葉に気付いてと願うように……

「そうなのよ、唯人！ 紗羅ったら、あなたがアメリカへ行つたあと、ひどく塞ぎ込んでしまつてね。そのとき、荻島さんのことを思い出して紗羅に彼を紹介したのよ」

「……ふうくん」

興味がなさそうに相槌を打つ唯人の目は、紗羅だけを見つめていた。

「そのあと、荻島さんも積極的に紗羅を訪ねるようになつてくれて。紗羅の入学式や卒業式の写真には必ず一緒に写つてているわ。そうそう、成人式のときも紗羅を迎えてきてくれて、その日はずつと二人は一緒だつたのよ」

紗羅はハッと息を呑み、おもむろに俯いた。

唯人がいない間、紗羅と荻島がまるで恋人のように付き合っていたと、由美が暗に告げていることに気付いたからだ。

（もしかして、唯くんも勘違いをしている？）

紗羅は面を上げて唯人に目を向けるが、彼は面白くなさそうな表情でコーヒー・カップに視線を落としている。

「ゆ、」

唯くん——そう呼びかけるつもりだつたのに、それを遮るように、由美が「そうだわ！」と手を打つた。

「ほら、紗羅。荻島さんと庭に出て、色づき始めた紫陽花あじさいでも見てきたら？ せつかく時間を割いて来てくれたんだから、彼のお相手をしてあげなくてはね」

「でも」

当惑しながら唯人へ目を向けるが、彼は内心を読ませない表情で紗羅を見つめている。

（その瞳に浮かぶ影はいつたい何？ わたしに何を伝えたいの？）

紗羅はどうすればいいのかわからず、まごつきながら目を泳がせた。

「わたし、あの……」

「ほら、紗羅ちゃん。庭へ行こう」

荻島がソファから立ち上がり、紗羅に手を差し出した。このまま押し問答をしていたら、さらに悪い方向へ進むような気がして、紗羅は仕方なく荻島の手に自分の手を載せて立ち上がる。

「じゃ、社長。紗羅ちゃんをお借りします」

「ゆっくりしてきていいのよ」

ほがらかな笑みを浮かべる由美に送り出された荻島は、紗羅を急きたてるようにして庭へ向かった。

手を引つ張られながら、一瞬だけ後ろを振り返る。由美は喜色満面で紗羅に手を振り、唯人は手に持ったコーヒーカップに視線を落としていた。

外に出るとすでに陽は落ちていたが、庭はライトアップされていて鑑賞に問題はない。

応接室からも楽しめるように作られた、薔薇の花壇。

その先をしばらく進めば紫陽花を見られるが、あえて紗羅は応接室から近い場所で立ち止まつた。

「修司くん」

荻島の名を囁きながら彼の腕に触れ、しつかりと握られた手をゆっくり引き抜く。

「俺さ……」

荻島は軽く息をつき、両手をズボンのポケットに入れて天あおを仰いだ。だがすぐに、思い詰めた表情で紗羅を見下ろす。

「紗羅ちゃんが、櫻井のことを今でも一途に想つてることは知つてる。でもさ、俺の前で露骨に好きだというオーラを出されると、俺……あいつに挑戦したくなる」

紗羅は息を呑み、真摯な眼差しを向ける荻島に小さく頭を振つた。

「わかってるよ。紗羅ちゃんが高校三年だったあの日、俺は見事に玉碎ぎょくざい」した。この想いが届かなくて、紗羅ちゃんの傍にいられるだけでいい……俺はずつとそう思つていた。その願いが叶つて、俺は今や……紗羅ちゃんの一番近くにいる。櫻井には決して話せないことを知るまでに……」

「それは」

（修司くんがわたしにとつて特別な男性だから、知つてゐるわけじゃないわ！）

気持ちを伝えようとしたとき、ガサガサと草が揺れる音がした。

（誰かが、わたしたちの話を聞いていた？）

紗羅はすぐに後ろを振り返つたが、そこに人の気配はない。

「紗羅ちゃん？ どうかした？」

「ううん、今……何か音が聞こえて」

もう一度耳をますますと、今度こそ石畳がカツンカツンとリズム良く鳴る音が聞こえた。

「紗羅！」

鈴を転がしたような可愛らしい声に紗羅は破顔して、木陰から現れた玉岡逸美に目を向いた。

「逸美ちゃん、来てくれたのね！」

紗羅は両腕を広げて、短大時代からの友人である逸美を抱きしめた。彼女のショートボブの髪が、紗羅の頬を優しくくすぐる。

「当然でしょ！……荻島さんも来てるって書いてあつた」

紗羅の耳元で囁く逸美に、紗羅は「逸美ちゃんを応援したいもの」と返した。

「こんばんは、荻島さん」

抱擁を解いた逸美は、魅力溢れる笑みを荻島へ向けた。

「やあ、玉岡さん」

紗羅が短大の入学式で知り合い、すぐに意気投合した大親友の逸美は、ジュエリーカーシーに就職し、今ではジュエリーアドバイザーとして神戸本店で働いている。

先ほど荻島と顔を合わせたあと、紗羅はこつそり逸美に「修司くんが来てるから、遊びに来て」とメールで伝えたのだ。だが、仕事で行けないと断られてしまった。

でも、絶対に顔を見せると思っていた。逸美は荻島に恋をしているから……。

逸美と荻島が知り合つて三年目ということもあり、二人は楽しそうに話していた。この場を離れ

ても大丈夫だと確信した紗羅は、こつそり一人から遠ざかり応接室へ戻る。

シャンデリアが煌々と灯つていたため、暗がりからでも室内が覗けたが、そこには誰もいなかつた。テーブルに四客のコーヒーカップが置かれたままになつている。

（唯くん、いつたいどこへ行つたの？ 部屋へ戻つた？）

紗羅は数歩下がつて、二階を見上げた。ここからは小さな窓しか見えないが、唯人の部屋にはまだ明かりが点いていない。

「唯くん、どこへ行つたの？」

紗羅はそこを離れ、荻島と逸美がいる場所とは逆の方向へ歩き出した。玄関へ続く石畳を通り過ぎ、プライベートホールがある方向へ進む。

照明で照らされたホールサイドに目を向けると、目の端に黒い人影が入つた。さらに近づくことで、その黒い人影が唯人だとわかつた。

彼はホール際に座り、水の波紋をぼんやりと眺めている。

その横顔が心なしか寂しそうに見えるのは、紗羅の目がおかしいのだろうか？

八年ぶりの再会だつたのに、唯人を置いて庭に出るべきではなかつた。彼への恋慕を抑えきれず、紗羅は彼のもとへ駆け寄ろとした。

だが、その足は数歩進んだところでピタッと止まつた。

唯人がただ物思いに沈み、水の波紋を眺めているわけではないとわかつたからだ。  
彼が少し躯を動かしたことで、何かを耳に押し当てる姿が見えた。

「……八年つて、意外と長いんだな。俺は俺で……まつ、楽しくしていんだけど」

そこで言葉を止めた唯人は、紗羅が見たこともないような冷笑を浮かべ、つまらなさそうに声を漏らした。

「はいはい。……純香にはいい思いをさせてもらいました」

唯人の口から発せられた女性の名前に、紗羅の心臓が飛び跳ねる。

どういった関係なのだろう？ 恋人？ 日本にいるころは、女性の影などなかつたのに？

「なんか……今日の俺、頭の中がグルグルしてる。この日を待ち望んでいたはずなのに、なぜか当たり散らしたくなるんだ。何かで紛らわそうとしても、どうやつていいかわからないくつていうか……」

唯人は薄笑いを浮かべて、素足でプールの水を蹴った。

「俺は、セックス狂いじゃない。もちろん、男としての欲望はあるけどな」

紗羅は唇を噛みしめながら手で喉元を覆い、苦しみから逃れるように軽く俯いた。喉の奥に妙な痛みを覚えて、上手く息ができない。

セックスの話ができる女性ということは、とても親しい間柄なのだろう。自分には決して入り込めない関係に胸が熱くなり、そのまま焼け焦げてしまいそうな苦しみが襲つてくる。

もしかして、告白する前から……玉砕？

紗羅はそっと空を見上げた。

真つ暗な闇の中にぼんやりと浮かぶ三日月。神々しく輝くその月が、どんどん朧月に変わっていく。「ゆ、い……くん」

＊＊＊

紗羅は囁くように彼の名を呟き、そのまま瞼を閉じた。目尻から熱い霧が伝い落ちてもその場にじつと佇み、唯人に声をかけることはなかつた。

＊＊＊

「悪いけど、俺さ……、紗羅のことは妹としか見られない」

胸を驚掴みにされたような痛みに、紗羅は泣きたくなつた。

「でも言つたじゃない！ 初めて会つたとき、俺には妹はいないつて」

「当然だろ？ 警戒している紗羅の心をほぐすには、ああ言うしかなかつたんだ」

哀れむような眼差しに、紗羅は顔を強張らせて頭を振る。

「やめて、そんな目で見ないで……。わたし、唯くんのことが好きなの！」

「……ごめんな、紗羅。俺には、好きな人がいるんだ。彼女は純香といつて」

「い、イヤーーー！」

紗羅は自分の悲鳴に驚き、目をカツと見開いた。全力疾走のあとのように、口から荒い息が断続的に漏れる。生々しい映像に躯が震えたが、見慣れた天井、部屋を満たす朝の光、躯に触れる上掛けの感触に、やつと強張つた躯から力を抜いて、長い息をついた。

「ゆ、夢だったのね……」

なんて嫌な夢なのだろう。あまりにもリアルすぎて気分が悪くなる。それほど純香という女性の

ことが、心に引っかかっているということだろう。

紗羅はベッドから身を起こし、汗でじっと濡れた額を手の甲で拭<sup>ぬぐ</sup>つた。何度も深呼吸をして、不規則に打つ鼓動を落ち着かせようする。

そのとき、何かが彼女の視界に入った。

「うん？」

おもむろにナイトテーブルへ視線を向ける。そこにあるのは、一枚の白いメモ用紙と、バスケツトボール大のテディベア。

「何、これ？」

メモ用紙を手に取り、そこに書かれた字を読む。

『紗羅が二十歳の女性だということを忘れて、ぬいぐるみを買ってしまった。俺が持っていても仕方ないから受け取つてほしい。あと、お昼と一緒にしないか？ 会社へ寄つてくれ。唯人』

「えつ？ ……えつ!?」

紗羅は頬を染めて、何度も手に持つたメモ用紙とぬいぐるみとを交互に見つめる。

「ど、どうしよう……、すごく嬉しい！」

感極まつて目の奥がチクチクしてきたが、すぐに涙を振り払つてテディベアに手を伸ばす。だが、柔らかな感触が手に触れる寸前で、紗羅の動きがピタッと止まった。

「待つて。……このメモとテディベアは、いつここに置かれたの？」

もしかして、唯人本人が部屋に入つてきた？ ベッドで寝ている紗羅を、唯人は眺めていた？

無防備な姿を唯人に見られたかと思うと、恥ずかしくてたまらなくなつた。紗羅は頬を染め、よだれを垂らしていなかつたか確認するために慌てて口角に触れる。

「だ、大丈夫よね」

安堵の息をついて肩から力を抜くと、時計に目を向けた。時刻は、八時三十分。由美と唯人は、もう仕事で出かけているだろう。

紗羅が高校を卒業してからは、平日の朝食は各自で取ることになつていたので、寝坊しても咎められることはなかつたが、せめて今日ぐらいは早起きすれば良かつたと思わずにはいられなかつた。そのとき、紗羅はハッと息を呑み、天井を仰いだ。

「そうだった。せつかく唯くんが誘つてくれたのに、今日は昼食を兼ねた打ち合せが！」

唯人に連絡を入れようかと思つたが、どうせ本社へ行くことになつてゐるので、直接会つて話した方がいいかもしれない。

「お土産のお礼も、唯くんの顔を見て言いたいし……」

そうと決まれば、今日こそは唯人のためにお洒落<sup>しゃれ</sup>をしよう。昨日よりもつと素敵な女性と思つてもらえるように。

昨夜のプールでの出来事と、今しがた見た夢に不安を覚えて、紗羅は痛む胸にそつと手を置いた。ここで諦めてはダメなんだからね——しっかりと自分に言い聞かせて、紗羅はベッドから飛び降り、裸足<sup>はだし</sup>のままバスルームへ向かつた。

兵庫県のJR三ノ宮駅で下車した紗羅は、数分歩いた場所にある六階建てのビルに入った。

そこが、株式会社ジュエリーKASHIの本社ビルだつた。隣には、店舗第一号の神戸本店がある。

親友の逸美が出社しているか確認したかつたが、まずは仕事を優先すべきだと思い、紗羅は本社ビル三階の広告宣伝室へ向かつた。

紗羅は社員ではなかつたが、社長が娘同然に可愛がつてゐる里子として知られてゐるので、社内を好き勝手に歩いていても咎められることはない。

「ここにちは」

広告宣伝室に入つた途端、荻島がデスクから立ち上がり立つた。にこやかな笑みを浮かべて紗羅の方へ駆け寄り、彼女の肩に手を載せる。

「紗羅ちゃん、今日は早いね！ 約束の時間まであと一時間もあるのに。まつ、俺は早く君に会えて嬉しいけどさ」

「ちよつと……、六階にも行つておこうかなと思つて」

そう告げた途端、荻島の眉間に皺が寄つた。

「六階って、樺井のところ？ 家で会えるのに、会社でもあいつに会いたいんだ？」

「違う、そうじやなくてね……」

顔の前で手を振り、唯人に会いたくて行くのではないと告げる。

もちろん、本音を言えば会いたくてたまらない。だが、荻島の前で唯人への想いをあからさまに

してはいけないとわかつてゐるので、あえて心に蓋をした。

「失礼いたします。本日付けて常務に就任しました、樺井唯人を紹介します」

（えつ？ ゆ、唯くん！？）

ドアに背を向けていた紗羅は、慌てて後ろを振り返つた。入り口にいるのは、由美の第三秘書として働いてゐる加賀宗彦。彼が室内を見回して紗羅に視線を止めた瞬間、彼の後ろから唯人が入つてきた。

「仕事の手を止めさせてしまつて……」

唯人の声がそこで止まる。部屋を見回していた彼の目が、紗羅を見るなり大きく見開かれる。

「どうして、紗羅が……」

彼の目が彼女の隣に移り、一瞬にして無表情になつた。

「……常務に就任いたしました樺井です。これからは私も最終確認をさせてもらうことになります。

消費者の心を動かすような広告を目指して頑張つてください」

社員の拍手を受けたあと、唯人は紗羅のもとへ歩いてきた。

「紗羅、どうして広告宣伝室にいるんだ？ まつすぐ上へ来たら良かつたのに」

そつと手首を取られ、彼に引き寄せられる。肩から荻島の手の温もりが消えたのもわからないまま、紗羅は唯人を見上げた。

「あつ、ごめんなさい」

「ふうくん、紗羅は社長から特別入館証を作つてもらつてるんだ？」

手を伸ばし、紗羅が首からかけた入館証に触れる唯人。彼の指が、かすかに紗羅の胸に触れた。ただ軽く当たっただけなのに、恥ずかしくて頬が火照つてくる。

紗羅は顔を隠すように俯き、髪を耳にかけながら「うん」と伝えた。

「……昼食の件で来てくれたんだろ？ 少し早めに切り上げるから、外で

途端、紗羅の軀からが後ろへ引っ張られた。

「あっ！」

背中に何かが当たり、ビックリして振り返る。紗羅の肩を掴んだ荻島が唯人を見ていた。

「それは無理。紗羅ちゃんは先約があるんだ」

「先約？」

「そう……この俺と」

荻島の言葉に、紗羅は目をぱちくりさせた。確かに、彼の言葉は正しい。今日のお昼は荻島と一緒にすることになつていて。でも、一人きりではない。社長である由美も同席するからだ。

「紗羅……、荻島と昼の約束を？」

「……うん、そういうの。でもね」

由美も一緒にと言おうとした紗羅に、唯人はいきなりにこやかな笑みを浮かべて頷く。

「そうか。それなら早く言えばいいのに。じゃ、荻島とランチを楽しんでおいで」

唯人の目を見て、紗羅の背筋に寒気が走つた。

彼の話し方は優しく、声音もいつもより柔らかい。にもかかわらず、今まで見たことのない冷た

い光が彼の瞳に宿つていた。

「ゆ、唯くん……！」

用件は済んだとばかりに、唯人は紗羅に背を向けた。彼女が呼びかけても振り返らず、そのまま出ていく。

紗羅の呼びかけを無視するなんて、今までにあつただろうか？

戸惑いを隠せない紗羅は、唯人が視界から消えるまで、ずっと彼の背中を見続けていた。

## 二

唯人付きの秘書となつた加賀と社内の挨拶回りを終えたあと、唯人は新しくあてがわれた六階の常務室に戻つていた。

デスクには稟議書りんぎょくしょや契約書が積まれており、早く仕事をしろとせつつかれているように感じたが、唯人はそれに手を伸ばすことができなかつた。

こんな感情を、今までに抱いたことがあつただろうか？

紗羅と再会してから二十四時間も経つていいのに、薄汚れた黒い煙のようなものが、心の中でグルグルと渦巻いている。胸を焦こがすほどの熱をもつているものもあれば、氷のように冷たく、凍凍傷じょうのような痛みをもたらすものもあつた。

「ク……ツ！」

シャツが敵になるのもかまわず胸元を手で掴み、唯人は呻き声を抑えようと歯を食いしばった。湧き上がるこの感情から逃れるためには、紗羅のことを一度頭の中から消してしまってしかないと。

だが、そうしようと思えば思うほど、唯人を見つめる紗羅の眼差し、美しく成長した彼女の姿態が頭にこびりついて消えない。

緩やかに波打つ艶やかな髪、シルクのようにきめ細かい白い肌、花が咲いたような愛らしい唇、そして唯人の手のひらから零れそうなほど豊かな乳房。

(紗羅と会っていない時間が長すぎたのだろうか？　あの幼かつた女の子が、いきなり大人の女性へと成長し、眩しい光を放つて俺の前に現れたから？)

唯人は胸が張り裂けそうな激情に駆られた。苦悶に表情を歪めながら、瞼をギュッと閉じる。

いつも唯人のあとを追いかけていた紗羅の瞳が、今では唯人だけではなく荻島にも向けられている。荻島が差し出した手にためらいもなく自分の手を重ね、親しげに肩に触れられても全く嫌がる素振りを見せない紗羅。

それが無性に気に障り、唯人の胸を焦がす。

「何だつていうんだ……俺は！」

そのとき、デスクに置かれた電話が鳴り、スピーカーから加賀の声が聞こえた。

『企画開発室の遠峰さんが、唯人さんにお会いしたいと来ておりますが……』

ボタンを押し、何も考えず「入れてくれ」と告げた。するとすぐにドアが開き、スレンダーな体型の美女が、黒い髪を揺らして入ってくる。

唯人を認めるなり、彼女の大きな瞳に喜びの煌めきが増した。

「唯人、お帰りなさい！　やつと……会えたわね」

黒のジャケットにマーメイドラインのミニスカート、白いレース仕立てのキャミソールは、彼女の美しさを十分に引き出していた。

彼女の名は遠峰純香、唯人と同じ二十七歳で……彼の元セックスマッチフレンド。割り切った関係と言えばいいのだろうか。彼女の所属は企画開発室だったが、バイヤーチームの彼とは違い、彼女はバイヤーやデザイナーと検討を重ね、店頭に並ぶ商品を作るのが仕事だった。

やがて二人は、アメリカで会うたびに軽い関係を結ぶようになった。

だが、純香が唯人を束縛する素振りを見せたため、彼はバイヤーへ昇格すると同時に彼女との関係を終わらせた。

純香は唯人の決断に肩をすくめ、二人は穏便に別れた。

仕事で顔を合わせることもあるため、それ以後も、友人として付き合いを続けていたが、こんな風にいきなり執務室へ乗り込んできたのは、別れてから初めてのことだった。

「純香？　いつたいどうしたんだ？　仕事中だというのに……」

「……やつと日本へ戻ってきたのに、あたしの誘いを断つてさっさと家に戻ったでしょう？　昨夜

はそのことについて文句を言おうと電話したんだけど、ちょっと欲求不満だったみたいだから……  
今日はあたしが必要かなと思つて」

「おい、何を言つてんだ？ 僕たちは……っ！」

唯人はそこで息を呑み、純香の行動に目を見張つた。彼女は妖艶な笑みを浮かべてジャケットを脱ぎ、それを絨毯に落としながら唯人の方へ近寄つてくる。これみよがしにソファの背を指で撫で、デスクを回り、唯人の前で立ち止まつて彼のネクタイを掴んだ。

「あたしがわからないとでも？ 唯人が鬱積した感情を抱いているってすぐにわかつたわ」

唯人の股間部分に膝をつき、軽く刺激するように押しつけながらネクタイを解く純香。

（いけない、駄目だ！）

そんなことはわかつているのに、唯人の躯を知り尽くした純香の愛撫で下半身に血が集中していく。

「わかつてる……。あたしたちの関係はもう終わつたって。でも、少しごらい楽しんでもいいんじやない？ 唯人とあたしの仲なんだし」

「……純香」

純香が唯人に顔を寄せてキスをした。今まで何度こういうキスをしてきただろう。純香は“ゼッタスをしよう”と誘いをかけるときは、いつも唯人の下唇を甘噛みし、舌で輪郭をなぞつた。まさに今、彼女は唯人に誘いをかけている！

「つんん、はつ、ああ……」

キスにうつとりしたのか、純香は甘い息を漏らし、うつすらと開いた目で唯人を見つめてくる。  
「ねえ、いいでしょ？ あたしが……唯人の心にある燃りを取り除いてあげる。だから、今を楽しみましょう」

この燃りを取り除く？ 紗羅のことを考えないようにさせてくれると？ ——声にならない思いを、目で純香に伝える。

優しく、それでいて欲望を刺激する彼女の眼差しを見ていると、悪魔の囁き声が脳の奥で響いた。昔の女に忘れさせてもらえ……と。

頭の片隅では、危険だとわかつていた。ここで誘惑に屈したらあとで厄介なことになる。

だが、唯人はもう何も考えたくなかつた。荻島と紗羅の仲睦まじい姿が頭の中に浮かぶだけで渦巻く、どす黒い情念から逃れたかった。

「……あたしを見つめるその瞳に浮かぶ光。ええ、もう唯人の心がわかつたわ。あなたの欲望を解き放つてあげる」

唯人のシャツのボタンをはずし始める純香のキャミソールに手を伸ばし、裾をゆっくりとめくり上げる。彼女は妖艶な笑みを零し、唯人のズボンからシャツの裾を引っ張り出した。

「唯人……、あたし……あなたを忘れたことなんて、一度もなかつた」

椅子に座る唯人の膝に腰を下ろし、キスを求めてくる純香。彼女の背に両腕を回して、そのキスを受け止めた。

「唯人っ！ ああ……」

純香の昂ぶりが尋常ではないことに気付きながらも、唯人は紗羅に抱く感情から逃れるために、欲望という名の濁流にそのまま呑まれていった。

——数分後。

男女の交わった濃厚な匂いが、執務室に充満していた。

さきほどまで唯人の膝に座つて快樂を貪っていた純香は、彼に背を向けて衣服の乱れを直している。唯人は椅子にだらしなく座り、その姿をぼんやりと眺めながら小さなため息を漏らした。

久しぶりに味わった悦びに嬉々としてもいいはず。

だが、純香のリズムで欲望を刺激されても、唯人の心はここにあらずの状態だった。欲望にふける男女の姿を、上から覗き込んでいるような錯覚に陥る始末。

全く高揚もせず、ただ疲労感しか覚えないセックスなんて生まれて初めてだつた。

「……唯人、あたし……やっぱりあなたのが諦められない。アメリカで別れを告げられたときは仕方ないって思つたけど、これからはこうやって頻繁に顔を合わせができるんだから、またあの関係に戻りたい。ううん、さらに一步進めてもいいって思つてる」

衣服を整えた純香が振り返り、満たされた悦びに瞳を輝かせて唯人を見つめた。

「あたしたち、もう一度きちんと付き合いましょ。セフレなんかじゃなくて……」

「……いや、純香とは付き合えない。誘われるままお前を抱いてしまつて悪かつたが、俺にはその気が全くないんだ」

唯人の言葉に、純香は軽く肩をすくめた。二年前、彼女に別れを告げたときと同じように。

「今は……ね。唯人の仕事が落ち着いてきたら、その気持ちもきっと変わるわ」

純香はにつこりと微笑んで唯人へ投げキッスをし、手を振つて執務室から出ていった。

静けさを取り戻した部屋に、唯人の力ないため息が響く。

「……最悪だ。こんなことをしたつて、俺の心から紗羅が消えるわけでもないのに」

この部屋にいた純香のことではなく、またも紗羅のことを気にする自分に苦笑を漏らす。

いつたい俺は紗羅をどうしたいんだろうか？——と何度も自分自身に問いかけながら、シャツのボタンをはめた。

(もしかして……、純香を抱いたように、紗羅を組み敷きたいとでも?)

冗談のつもりだつたのに、紗羅にのしかかる自分を思い浮かべた瞬間、唯人の心臓が痛いほど早鐘を打ち始めた。

純香が白い喉元を露にしながら喘ぐ姿を見たときよりも、震えが走る。ドクドクと血の流れる音が聞こえ、唯人の昂ぶりが増していく。

「ま、まさか……。俺は、紗羅を女として……見てるのか？」

そう口にした途端、唯人は思わず片手で口元を覆つた。頬がどんどん熱くなるにつれて、紗羅が欲しくてたまらなくなる。

妹のように可愛がつていた紗羅に心を奪われ、さらに欲情を覚えるとは……

(ですか。だから……荻島が紗羅に触れると、どうにも我慢がならなかつたのか！)

自分の胸にあるこの想いこそ、異性に対する愛だと気付いた唯人は、心の奥底から興奮を覚えた。

だがその気持ちとは裏腹に、ゆっくりと立ち上がり、陰鬱な面持ちでその場に立ち尽くす。

それでいいのか？——と自分に問いかけた途端、唯人は慌ててデスクの周囲を歩き出した。

「……やっぱり駄目だ！ 紗羅が樺井の家へ来たとき、一人ぼっちになつた彼女を俺が守つていくと約束したんだ。なのに、この俺がそれを壊すような真似をしてどうする？」

もし唯人が手を出したことで、紗羅から軽蔑の眼差しを向けられるようになつたら？

唯人は激しく頭を振り、自分から去つていく紗羅の後ろ姿を脳裏から消そうとした。

「嫌だ。俺は紗羅を失いたくない！」

この想いを封じ込めなければ、どんでもないことになる。

紗羅は、唯人を兄のように思つてゐるからこそ、昔と変わらず気軽に唯人の躯に触れてくる。腕を絡めたり、恋人のように頭を肩に載せたりでるのは、唯人を男として見ていていいからだろう。そんな紗羅をいきなり抱きしめたらどうなるだろうか？

「駄目だ！」

紗羅から憎悪に満ちた眼差しを向けられると思つただけで、心臓を驚撃みにされるほどの痛みが襲いかかってきた。

突如浮かび上がつた光景から逃れるように、唯人は激しく頭を振る。

（紗羅への想いはこのまま押し殺すべきだ。結果、胸を搔きむしりたくなるような痛みに襲われても……俺に向かられるあの艶やかな微笑みが見られなくなるよりマシだ！）

それなのに、やり切れない想いが胸を焦がすのを止められない。

「……仕事だ！ そう、仕事をしよう」

閑々とした想いを振り払うように大きく息を吐き出し、仕事モードに切り替えるんだと何度も言い聞かせてデスクに戻つた。

「はあ……」

自然と漏れるため息に苦笑したとき、書類の中に埋もれている小冊子が目に入る。

「これは我が社で作つてゐるジュエリーのパンフレットだな。……うん？」

バイヤーとして働いていたのだから、普通ならジュエリーに関心を持つはずなのに、唯人の目を奪つたのは、それを身に付けたハンドモードの華奢な“手”だった。

白くて透きとおるような手の甲、しなやかに伸びる指、そして美しいポージング。

（ただの手だというのに、いつたい……どうしてこんなにも気になるんだ？）

不思議に思いながらも、唯人はこの手の持ち主に興味を抱いた。この手で腕を撫でられるところを想像しただけで、妙に胸が高鳴る。

紗羅に感じたような胸を締めつけられる甘い痛みはないが、それでも彼女以外の女性に興味を抱くのは、とてもいいことのように思えた。

「そうだな。ほんの少しでも興味をそそられる女性がいるのなら、そちらへ目を向けた方がいいのかもしれない。そうすることで、俺自身から紗羅を守ることができる……」

紗羅以外の女性に目を向けてこの想いを殺すことで、彼女から変わらない敬慕を受けられるだろ

う。そう答えが出ると、唯人は安堵の息をついた。

（こうするしかないんだ。俺の欲望から紗羅を守るために……）

唯人はパンフレットに視線を落とし、興味を抱いた手をもう一度見つめた。

ジユエリーKASHIと契約してくれたお礼も兼ねて、この女性を食事に誘い、素敵な関係を結べないか考えてみよう。

唯人はメモ用紙に“ハンドモデルの連絡先、加賀”と走り書きしたが、すぐに秘書の名を消し、広告宣伝室で働いている荻島の名前に書き換えた。

紗羅の想い人が荻島だと思つただけで胸がムカムカし、彼に罵声ばせいを浴びせたくなる。そんな事態を引き起こさないために、唯人は前に進むしかない。

気持ちを仕事に向けるためにパンフレットのページを捲り始めたが、唯人は我知らずため息をついていた。

### 三

「紗羅？ それでいいわね？ ……紗羅、聞いているの？」

テーブルに置かれたカップの柄を見つめ、別れ際に見せた唯人の不可解な態度を考えていた紗羅は、その声で我に返つた。

急いで面を上げて、正面に座る社長……樺井由美を見つめる。

「ごめんなさい、おばさま……いえ、社長」

「大丈夫？ 疲れてるのならちゃんと言つてね？ 無理をさせたくないんだから」

無理に口角を上げて頷き、心配ないと告げる。

「大丈夫です。えっと……あとはわたしが判を押せばいいのね」

問い合わせるように隣に座る荻島を見ると、彼は静かに頷いた。

「そうだよ。この契約書に判を押せば、契約は成立だ」

荻島が差し出した朱肉を受け取り、紗羅は印鑑を手にした。会社の契約書は全て弁護士の真柴が目を通している。さらに紗羅のマネージャーのような存在の荻島も確認してくれているので、紗羅が身構える必要はなかつた。

株式会社ジユエリーKASHI本社からほど近い場所にある、フランス料理店の個室。由美と専務と荻島が見守る中、紗羅は指定された場所に判を押した。

ここ二年ほど務めてきたハンドモデルから、新しく作られるブランド“SARA”的イメージモデルになるために。

「ありがとうございます、紗羅。無理ばかり言つて本当にごめんなさいね。でも、カメラマンの泉くんが言つたように、コンセプト重視でいくならプロのモデルよりも紗羅の方がいいと思ったのよ」

「泉さんの言うとおり！ 僕も紗羅ちゃんがいいと思った」

につっこりと微笑んで、紗羅を励ましてくれる荻島。それでも彼女の表情は晴れなかつた。